

▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶ 労働観の表象と変遷に関する比較歴史社会学的研究 —研究プロジェクトの開始にあたって—

千葉商科大学商経学部 准教授

松下 幸生

MATSUSHITA Yukio

はじめに

本研究プロジェクトは、「働くこと」「労働」をめぐる表象と変遷に着目して、「労働」概念に関する既存の把握に潜むバイアスを洗い出し、経済学・経営学・社会学・歴史学・地域研究等々の学際的・世界史的な比較の視点で「働くこと」を再把握する基盤を形成しようとするものである。研究メンバーは、荒川敏彦教授（ヴェーバー研究、研究代表者）、師尾晶子教授（西洋古代史、古代ギリシア史）、朱珉教授（社会保障）、奥寺葵教授（人事労務管理）、そして筆者（下請制論、資源依存論（中小企業対象））でありそれぞれの専門領域に対応するかたちで研究プロジェクトに取り組んでいる。

1. プロジェクトの到達点と展望

上記の目的のために、以下の研究を予定している。

2022年度は、「労働」についてさまざまな領域で蓄積されてきた議論・学説を整理するための情報収集と整理を実施した。第一に、石見銀山と奥出雲を訪れ、国内諸地方において労働がいかなる仕方で表象されているか（表象されてきたのか）を実見し、文献上の議論を相対化する視点を養う。訪問では、諸地方の労働の現場や、博物館での過去の労働の表象され方や、美術作品における労働の描かれ方など多岐にわたる領域で、働くこと、労働という場を再考する機会を得ることができた。第二に、山形県（とりわけ米沢市）における明治時代から大正時代にかけての労働観について理解を深める狙いで布施賢治教授（山形県立米沢女子短期大学）による講演会を開催した。第三に、労働観の理解を深める一環として石川茉莉氏（連合総合生活開発研究所）による講演会を開催した。

2023年度は、初年度の研究課題を継続し、さらに知見を広げる。第一に、研究史の整理と視野の拡張のための研究会、第二に、イスラム世界の労働という視

点からの認識の転換に向けて、トルコでの海外調査（共同研究によって共通認識を獲得する）を実施予定である。国内調査と同様に、文献上の議論を確認・相対化する視点を獲得するためには、現場・現物（一次史料）を実見することが不可欠である。とくに日本国内以上に、海外の現場を確認することの意義は大きいと考えられる。自然災害等の動向次第だが、手配時点で可能な調査ができることを期待しての計画である。状況次第では国内調査や文献調査への変更もありうるが、今後の（学生を含めた）全学的な国際的研究や交流の推進のためにも、まず教員が国外に出て活動する機会を増やすことは重要であろう。

加えて『国府台経済研究』に寄稿するための準備を始める。具体的には、草稿を研究会の場で報告し合い、専門領域の異なる視点から検討を加えていく。

（1）労働観の変遷と生の一元化

働く、稼ぐ、仕事をする、労働するなど、さまざまな表現で語られる生の営みの表象と変遷への問いは、資本主義社会における生き方の枠組みを問い直す試みでもある。かつてマックス・ヴェーバーは、プロテスタンティズムにおける「職業＝召命」観念の形成大に着目し、近代資本主義を駆動する精神の成立局面を宗教社会学的に解明した。しかしエートス形成を論じたその議論が、資本主義システムの成立という観点から解釈されることも多い。資本主義を成功させるためには、プロテスタンティズムの倫理によるような規律化が必要だ、とする議論である。かかる解釈で見逃されてきた問題は多いが、その一つは、さまざまな生の営みがことごとく神からの召命（職業）とみなされていく労働観の一元化をもたらす生の問題である。現代人が宗教的不安に駆られて働くことはないだろうが、職業労働のみが生き残るための唯

一の手段であるという観念は、広く浸透しているだろう。現代も、人びとの生活時間の多くが職業労働に費やされていることを踏まえれば、問題は生の労働への一元化として捉え直せるだろう。しかしヴェーバーは、世界宗教へと視野を広げた比較の視座から、職業労働に一元化されない生が営まれる世界の歴史的社会的構成を問題にしたと考えることもできる。本研究では、そうした比較史的視座を手がかりに、労働観の一元化過程とその一元化から免れる労働観のありかを探り、現代日本社会において生の多様性を取り戻す基礎的考察としたい。

(2) 古代ギリシアにおける労働観

古代ギリシア世界において、商工業従事者・職人・技術者らが自分たちの職業をどのように語り、行動していたかに焦点を当て、主に知識人による商工業従事者・職人への蔑視、および外国人蔑視の言説との差異と矛盾を明らかにすることから、古代ギリシア世界における労働観をめぐる諸相について考察する。とくに以下の2点に焦点を当てる。

1) 商工業従事者・職人・技術者による奉納銘と墓碑銘の分析。アルカイック期のアテナイにおけるいわゆる職人の読み書き能力については、これまでも論考を発表してきたが、本プロジェクトでは、奉納銘、墓碑銘を読み解くことから彼らの職業観と労働観を探る。古典期を中心にアルカイック期からヘレニズム時代初期までを考察の対象とする。当該市民による奉納銘、墓碑銘と外国人居住者による奉納銘・墓碑銘との差異にも注目することで、理想の市民像を語る言説との矛盾の背景への考察も射程に入れる。

2) 職業集団の組合(コイノン)とポリスの関係の分析。古代ギリシアのポリスにおける市民権の閉鎖性については、つとに知られている。一方、その政治制度から伺える以上に人々はポリスを超えた移動をおこなっていた。前4世紀末頃より、さまざまな職能集団の組合の存在が知られるようになる。ポリスの枠を超えた組合の活動の実態を探ることから、職業観、労働観の変化をたどってみたい。

(3) 中国における労働観と労働教育の変遷

労働観の変遷について、これまで代表的な議論として、物質主義から脱物質主義へ、自己犠牲から自己実現へ、「なりわいをたてること」から「自分さがし」へ、

「仕事中心」から「仕事と余暇の両立」などが挙げられる。異なる時代、異なる経済水準によって、労働の意味付けや動機付けは当然変化する。日本の若い世代において、「集団本位」ではなく「個人本位」で働く傾向があり、それは「個人化」という社会変動による結果であると指摘されている。この労働の個人化には二重の過程が含まれている。一つは個人が集団による拘束から解放され、自立と自由を手に入れることである。コロナ禍やデジタル化によって、テレワークや副業の推進、プラットフォーム就労の増加といった働き方の多様化はその現れである。もう一つは個人が集団による保護を喪失することである。社会保険を中核とする従来の社会保障は安定的な正規雇用を前提としている。いまその前提が揺らいでいるということは明白である。多様な働き方に対応するため、社会保障は再編しなければならない。デジタル経済の進展が早い中国では、すでに社会保険の機能強化に乗り出している。日本でも2018年から「働き方の多様化を踏まえた社会保険の対応に関する懇談会」が開催され、2019年にとりまとめが出されている。日本における議論を整理し、社会保険改革の現状と課題を明らかにしたうえで、日本の特徴あるいは今後の方向性について考察したい。

(4) 労働観の変遷と経営技法—WLB から WLI への視座—

ワークライフ・バランス(WLB)からワークライフ・インテグレーション(WLI)への視座について、労働観と経営技法の変遷から考察する。

資本主義ないし市場経済における企業経営は、営利原則に則って発展してきた。営利原則こそが企業経営の原理的特質である。ところが、近代以降の社会や文化の発展水準を示す尺度は、民主主義とヒューマニズム=人間性の普及の度合いである。それは、企業経営の原理とは別個のものである。しかも、営利性原則は、民主主義やヒューマニズムとしばしば対立してきた。

しかし、民主主義の発展した社会では、人に対する考え、人々の労働観は企業経営の決定的・原理的要素となる。たとえば、民主主義の発展の違いは、企業の社会的責任に対する考え方、労働組合に対する考え方の違いを生み出すのである。労働時間、雇用における男女差別などに対する考え方においてもしかりである。

本研究では、人々の労働観と企業の経営技法の歴史

を辿ることで、WLBからWLIへの変遷、言わば現代的な「仕事と生活」、「労働」の変遷を明らかにするものである。WLB問題に関して、賃労働と家事労働の分離をもとに考察する。その分離と賃労働の優位を前提にWLIの分析は、生活の論理を基軸に進める。実態としても歴史的にも家事労働の担い手が女性であることから、女性の就労との関連からWLIを位置付け、さらに「働き方改革」との関連から、WLIを経営技法の変化との関連から考察する。

(5) 地場産業と労働観

現在、伝統文化と呼ばれるものは、過去の流行の最先端であり需要も旺盛だった。将来の日本における文化の継承とは伝統文化を守るとともに、伝統文化の要素や記号を残しつつ私たちの暮らしに馴染む製品・サービスを創造することだと考える。情緒的な表現をするならば、初めて訪れた風景をみて郷愁や安らぎを抱くという感情に訴えるなにかを埋め込むかたちである。地域文化の振興を志す若者、および、後継ぎとなる中年層の後継者が増加している。こうした取組みを後押しするためには、所得と余暇を伴う将来の人生に対する前向きな期待を労働観と併存するかたちで抱けることが求められよう。

日本の現代産業史とムラ文化を鑑みれば整合性を取った解釈は可能だが、今回の興味の対象は大正時代から昭和時代にかけての労働観と地域文化の表象を整理することのみではない。今回の興味の対象は2点ある。1点目は時代背景を先行資料に基づき軽微に意識しつつも、大正時代に既存の地場産業を大きく発展させた事象の発生にともない、将来の人生に対する期待と展望がどのように変化したのかを捉え直すことである。2点目は1点目を踏まえ、近い将来に馴染むかたちで本テーマにおける日本文化の継承のひとつの方向性を考察することである。なお、考察にあたり、労働観と地域文化の表象の比較という視座を意識したかたちで取り組むものとする。

2. 石見銀山と奥出雲の調査について

中小企業金融公庫調査部(2003)『情報化の進展が地域産業集積に与える影響』によると、地場産業型集積の特質のひとつに、原材料の産出を基盤にしていることが挙げられる。石見銀山と奥出雲は良質な銀鉱石を採取してきたと同時に玉鋼の精錬技術も保有していたため

に、その特質を満たしている。その歴史は古く、鉄の道文化圏協議会(2017)『鉄づくり千年物語』によると、8世紀初頭から相対的に安価な海外の鉄の普及によって衰退する明治時代まで隆盛を誇った産業だった。石見銀山や奥出雲は地場産業型集積の代表的な地域のひとつである燕や三条と異なり、加工技能を基盤に時代に応じて最終製品を変容させてきたわけではない。燕や三条だと加工技能を基盤にして和釘、銅器、煙管、洋食器と衰退と変容をし続けてきたが、石見銀山と奥出雲では銀や鉄、そして、玉鋼という素材の精錬技能に特化してきた。たたら製鉄の役割は明治時代に流入してきた角型溶鉱炉に取って代われ、太平洋戦争の一時期を除けば産業としての灯は終焉し、観光資源に姿を変えている。日本刀鍛錬会による模索はあったものの、観光産業として地域と自然を暮らしとともに保全してきたからこそ、石見と奥出雲の調査は労働観という当プロジェクトの出発点としてふさわしい対象といえよう。

世界遺産に登録された決め手の一つとして、製鉄の一大産地にも関わらず自然と共生してきた循環型社会だったことが挙げられる。火、水、木、鉄、土がいずれも必要であり、観光産業に舵を切ったからこそ、多様な情報と遺物が残っている。換言するならば、石見銀山はたたら製鉄を中心に営まれてきた労働と経済の歴史を容易に垣間見ることのできる地域である。

他方で奥出雲は生活の営みを残している地域である。端的に述べるならば、2007年に制定された「石見銀山大森町住民憲章」に記されているとおりである。産地としての役割を終えた石見銀山や奥出雲は観光産業に変容したが、人の営みの拠り所として受け継がれるべき領域を無形文化として明確に残しつつ今に受け継がれている。

3. むすびにかえて

2022年度に初めてプロジェクト参加メンバー全員で実施した調査は、それぞれの課題の出発点として貴重な機会だった。専門領域の異なる課題ゆえに、直接的に今回の調査は反映されないにしても、比較や根源を検討する際に、そして、議論を重ねる際の拠り所になる探索だった。このような貴重な機会を与えて頂いた経済研究所、ならびに、代表研究者の荒川教授と調査に資する移動計画を立てて頂いた師尾教授にこの場を借りて心より厚く御礼申し上げたい。